「新版100億年を翔ける宇宙」

加藤万里子 著

恒星社厚生閣，170 ページ，2,200 円

教科書

お薦め度

☆☆☆☆★

本書は，著者の講義に参加する学生のために書かれた教科書であるが，その文体をはじめ，ユニークなさし絵や巻末の設問など，堅苦しいいわゆる“正統派”の教科書と異なり，最後まで楽しんで読むことのできる内容となっている．現代天文学のおもしろさを広く伝えるという意味では，むしろ啓蒙書に近いのかもしれない．

構成は，まず第１章で宇宙に存在する天体の階層，現代天文学の観測手法と光について述べ，第２章では古代の宇宙観から現代天文学の幕開けまでの歴史をたどる．第３章から第５章にかけて，宇宙のはじまりから銀河の誕生，星の生と死など，現代天文学が解き明かしてきた成果を最新の結果を交えて解説している．最終章の６章では，太陽系とその形成を通して生命誕生のシナリオに触れ，地球外生命の探査で締めくくっている．ある程度天文をかじった人は，最初はこの構成にとまどうかもしれない．太陽・惑星など身近な天体から，星・銀河・遠方宇宙へとスケールを広げて解説していくのが通例だからだ．しかしながら，実際に読み終えてみるとこれが逆に新鮮で，「現代天文学があきらかにした宇宙の姿」の全体像をつかんだ上で，「宇宙の中で地球と人間のおかれた位置を明らかにする」という著者の意図をよく反映していると感じられた．また巻末に用意された各章ごとの問題も，一見，易しく書かれているようで，実は現代天文学を学ぶ上で重要な問いかけや鋭い問題提起が随所に見られ，専門家にも楽しめる内容となっている．

不満を挙げるとすれば，内容の詳細度にかなりのムラが見られることだろうか．著者の専門を反映してか，理論的な内容は非常に詳しく丁寧に書かれている反面，例えば観測的な内容などに関しては驚くほどあっさりとしか書かれていない箇所が少なからずある．特に太陽系天体についてのくだりはこの傾向が強く，巻末に紹介されている参考書では十分にフォローできていないのも残念である．幅広い範囲をカバーした教科書を書くためには，専門外について多く学ぶ必要があり，非常に大変な仕事であるのはもちろんであるが，だからこそより慎重な内容の吟味と，例え短くても正確な記述が必要であろう．また本文の内容には直接関係ないものの，誤植がかなり多い点は早期の対応が望まれるし，文中で同じ言葉が漢字で記述されたりされなかったりと一貫性がないのも読んでいて少々気になった．

ともあれ，本書でなされている多くの試みは，新しいタイプの教科書として非常にユニークであるし，読者に最後まで飽きさせずに読まそうという工夫がよく伝わってくる．著者の天文学の講義も，きっと本書のとおり楽しいものに違いない．ぜひ講義を聞いてみたい，そんな気にさせるパワーが確かにある．また，この本の特徴の一つである，目の不自由な方への点字の図やフロッピーディスク版の製作にかけた努力も並大抵のものではなかっただろう．これまで一般教養の天文学に適した良書が少なく，また著者の人となりが全く見えてこない教科書が大半の中，本書の存在意義は非常に大きいと思う．

度會英教（宇宙科学研究所）